**元旦礼拝　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2025年1月1日**

**「新しい歌を歌おう」**

**詩編96編1～13節**

 **96:1 新しい歌を主に向かって歌え。全地よ、主に向かって歌え。**

 **96:2 主に向かって歌い、御名をたたえよ。日から日へ、御救いの良い知らせを告げよ。**

 **96:3 国々に主の栄光を語り伝えよ／諸国の民にその驚くべき御業を。**

 **96:4 大いなる主、大いに賛美される主／神々を超えて、最も畏るべき方。**

 **96:5 諸国の民の神々はすべてむなしい。主は天を造られ**

 **96:6 御前には栄光と輝きがあり／聖所には力と光輝がある。**

 **96:7 諸国の民よ、こぞって主に帰せよ／栄光と力を主に帰せよ。**

 **96:8 御名の栄光を主に帰せよ。供え物を携えて神の庭に入り**

 **96:9 聖なる輝きに満ちる主にひれ伏せ。全地よ、御前におののけ。**

 **96:10 国々にふれて言え、主こそ王と。世界は固く据えられ、決して揺らぐことがない。主は諸国の民を公平に裁かれる。**

 **96:11 天よ、喜び祝え、地よ、喜び躍れ／海とそこに満ちるものよ、とどろけ**

 **96:12 野とそこにあるすべてのものよ、喜び勇め／森の木々よ、共に喜び歌え**

 **96:13 主を迎えて。主は来られる、地を裁くために来られる。主は世界を正しく裁き／真実をもって諸国の民を裁かれる。**

**ヨハネの黙示録22章20～21節**

 **22:20 以上すべてを証しする方が、言われる。「然り、わたしはすぐに来る。」アーメン、主イエスよ、来てください。**

 **22:21 主イエスの恵みが、すべての者と共にあるように。**

1.

**2025年の元旦を迎えました。あけましておめでとうございます。**

**私は昨年12月16日月曜日朝9時ちょうど位に諏訪郵便局に行きました。すると年賀状専用の大きなポストの周りに20名ほどの幼稚園児と引率の先生と郵便局の局長さんを始め職員の方が数名と郵便局のキャラクターのポスくまくんがいました。何のイベントかなと思っていたら年賀状受付が開始された年賀状投函式でした。局長さんのお話、先生のお話が終わると子どもたちは皆で大きな声で「もういくつねるとお正月」を歌ってくれました。**

**「もういくつねるとお正月　お正月には　凧あげて　こまをまわして　遊びましょう　はやくこいこいお正月**

**もういくつ寝るとお正月　お正月には　まりついて　おいばねついて　遊びましょう　はやくこいこいお正月」。**

**歌い終わると子どもたちは自分で書いた年賀状を順番にポストに投函しました。**

**年の瀬でいつも以上に慌ただしい郵便局内でありますが、お客さんも職員さんもみんながほっこりと暖かな雰囲気に包まれました。**

**今の子どもたちは凧揚げもコマ回しもまりつきも羽根つきもしないと思いますが、それでもお正月をワクワクしながら「はやくこいこい」と指折り数えて待ち望むのは今も昔も変わらないと思います。そして、「はやくこいこい」と指折り数えて待ち望むのは何もお正月に限ったことではなく、私たちの日常の歩みにおいても来たる日を待ち望むのです。**

**病気で入院をしたら回復して退院できる日を待ち望みます。何か楽しみな特別な日があればその日を指折り数えて待ち望むものです。**

**わたしたちは先日クリスマスを迎えましたが、アドベントはまさにイエス様がお生まれになられることを待ち望むのであり、世の終わりの時に再び私たちのもとに来て下さるのを待ち望む時であります。そして、私たちキリスト者の歩みというのは一年中がそして生涯がアドベントといっても過言ではないと思います。「主の再び来たりたもうを待ち望む」日本基督教団信仰告白にあります。使徒信条にも「かしこより来りて、生ける者と死ねる者をさばきたまわん」と信仰の告白をしています。キリスト者は常に主が来られることを待ち望みつつ、主の日ごとにイエス様を礼拝し、福音を宣べ伝え、聖礼典を執り行い、愛の業に励むのです。**

1.

**「新しい歌を主に向かって歌え。全地よ、主に向かって歌え。」で始まる詩編96編は新しい年を迎えた礼拝で読まれるのにふさわしい詩編です。ここでは神様の御名を新たに褒め称え、その救いの良い知らせを日々宣べ伝えることを促しています。その理由は、他の神々は全て虚しいものであり、父なる神様こそが天地をつくられた造り主であり、全ての民によって栄光を帰せられる神様であり、さらにはこの地をさばく王として臨まれるからです。**

**13節には**

**「主を迎えて。主は来られる、地を裁くために来られる。主は世界を正しく裁き／真実をもって諸国の民を裁かれる。」**

**と終末時に主が再び来て下さることが告げられています。この詩編の中心は来たり給う神であり、その神が来られるのを私たちがどのようにして待ち望むかが語られているのです。それが「新しい歌」を歌うことです。**

**「新しい歌」とはどういう歌であるのかは色んな解釈があります。単純に神様を褒めたたえるために新たに作られた歌という解釈もあります。色々ある中で、主によって新たにされた者、すなわちイエス様の十字架の贖いによって救われて新たに生まれた者であるキリスト者が、聖霊によって日々新たにされて、世の終わりの救いの完成を見つめながら歌う歌という解釈があるのです。それはつまり、私たちが主の日ごとの礼拝で世の終わりの救いの完成を見つめて待ち望みつつ歌う讃美の歌が「新しい歌」であるのです。**

**ですから、私たちが「新しい歌を主に向かって歌え。」新しい年が来たから何か新しい歌を歌わなければいけないということではありません。どんなに古い讃美歌であっても、私たちが礼拝で歌うと、それは「新しい歌」となるのです。私たちはいつもの主の日ごとの礼拝で毎回「新しい歌」を大きな感謝と喜びを持って歌っているのです。私たちは礼拝ごとに「新しい歌」を歌って、救いの良き知らせ、十字架と復活の福音を告げ知らせて、イエス様が再び来て下さるのを待ち望むのです。**

**新しい年が始まりました。神様はこの年私たちにどのような恵みを与えてくださるでしょうか。その恵みを共に味わい、見て、分かち合いつつ、私たちは何よりも主を礼拝することを大切にして、「然り、わたしはすぐに来る」とおっしゃって下さるイエス様を、「はやくこいこいイエス様」と指折り数えて待ち望んでいきましょう。**